

普及活動現地情報

「農業現場では、今」

令和元年 11 月号



【西牟婁振興局】11/26 重点プロジェクト【気象条件等に対応した果樹産地の振興】
～ウメ「橙高」栽培実証園のせん定研修会を実施～

和歌山県農林水産部経営支援課

(農業革新支援センター)

はじめに

普及活動現地情報は、普及指導員等が行う農業の技術普及、担い手育成、調査研究、地域づくり等の多岐に渡る現場普及活動や、運営支援を行っている関係団体の活動、産地の動向等、その時々々の旬な現場の情報をとりまとめたものです。

それぞれの地域毎の実情に応じて、特徴ある普及活動を展開していますので、是非、御一読頂き、本情報を通じて、普及活動に対する御理解を深めて頂くと共に、関係者の皆様にとって、今後の参考になれば幸いです。

また、本情報については、カラー版（PDF ファイル）を和歌山県ホームページ内（農林水産部経営支援課：アドレスは下記を御参照下さい。）に掲載しており、過去の情報も閲覧出来ますので、併せて御活用下さい。

和歌山県農林水産部経営支援課ホームページ 普及現地情報アドレス

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070900/hukyu/>

検索サイトより、以下のキーワードで御検索下さい。



| | |
|--|---------------|
| I 海草振興局 | 1 - 2 |
| 1. 種ショウガの収穫調査・収穫見学会を実施 | |
| 2. イチジク株枯病調査を実施 | |
| 3. 和海地方農村青年交流会～極甘ミカン収穫とミカンジュース作り体験～を開催 | |
| II 那賀振興局 | 3 - 4 |
| 1. 各農業団体が紀の川市産業まつり & 食育フェアで地域農産物をPR | |
| 2. 新規就農者研修会を開催 | |
| III 伊都振興局 | 5 - 6 |
| 1. 小学生を対象に柿の体験学習を実施 | |
| 2. イベントで柿料理のPRを実施 | |
| 3. 新規就農者研修会を開催 | |
| IV 有田振興局 | 7 |
| 1. 小学校でみかんの授業が行われました！ | |
| V 日高振興局 | 8 - 13 |
| 1. 重点プロジェクト 【新病害虫や梅干し生産への特化のリスクに強い梅産地づくり】 ～日高地方クビアカツヤカミキリ連絡会議及び研修会を開催～ | |
| 2. 重点プロジェクト 【新病害虫や梅干し生産への特化のリスクに強い梅産地づくり】 ～梅のカットバック処理における低樹高化実証～ | |
| 3. 御坊市4Hクラブがプロジェクト活動の一環で現地検討会を実施 | |
| 4. 日高川町4Hクラブが試作園地で在来系高糖度サツマイモを収穫 | |
| 5. 日高町立内原小学校でみかんの出前授業を実施 | |
| 6. 印南町農業士会がジビエをふるまう～シカレディースも出動～ | |
| 7. シカレディースがシカ肉料理検討会を実施 | |
| 8. 印南町4Hクラブが中学生に印南町の農業を紹介 | |

Ⅵ 西牟婁振興局

14-17

1. 重点プロジェクト【気象条件等に対応した果樹産地の振興】
～ウメ「橙高」栽培実証園のせん定研修会を実施～
2. 分枝系ストックの育苗省力化試験～仮植えを省いた育苗体系へ～
3. 西牟婁地方農業士会女性部会が梅消費PR活動を実施
4. ジビエの出前授業で調理実習を実施しました

Ⅶ 東牟婁振興局

18-21

1. 古座川梅研究会がウメ剪定講習会を開催
2. 三津ノ地域活性化協議会が「サツマイモ収穫体験」を開催
3. にんにくの県内視察研修を実施
4. 東牟婁農業青少年クラブ連絡協議会が農産物即売会を開催
5. 和歌山大学食農総合研究所が東牟婁地域で現地研究会を開催

Ⅷ 農林大学校 就農支援センター

22-23

1. 特別研修「市場研修（大阪市中央卸売市場）」
2. UIターン就農相談フェアを開催
3. 特別研修「ジャム加工について」を開催

I 海草振興局

1. 種ショウガの収穫調査・収穫見学会を実施

和歌山市種生姜生産促進協議会（和歌山市、JAわかやま、県農、和歌山県）では、新ショウガ生産のための種ショウガの一部自給を目指し、栽培推進に取り組んでいる。4年目となる今年は、和歌山市内4地区（滝畑、山口、西和佐、山東）5戸の生産者が栽培に取り組んだ。

11月中に各園地において収穫調査を実施した。台風の浸水等により病害が発生した圃場もあり、全体の収量は平年よりもやや少ないと思われる。

今後、種ショウガとしての適性を判断するため乾物率等を調査するとともに、来春までJA貯蔵庫で根茎重の変化や腐敗の発生の有無を調査し、種ショウガとしての適性を判断する。

11月25日、山東地区での調査時、来年度から種ショウガ栽培を検討している農業者を対象に収穫見学会を実施した。参加者は栽培方法や収穫の手順について説明を受け、関係者に質問して農薬散布の方法や栽培面積などを検討していた。



収穫調査



収穫見学会

2. イチジク株枯病調査を実施

和歌山市のイチジクは山東地区で約8haの栽培面積があり、県内では紀の川市に次ぐ第2位の産地である。イチジクは軽量で単価も高く安定していることから栽培が盛んであるが、イチジク株枯病が産地全体に広がり、樹勢の低下から枯死に至るなど問題となっている。

農業水産振興課では、産地の状況を把握するためイチジク株枯病の全園全株調査をJAわかやま、JAグループ和歌山農業振興センター、かき・もも研究所と共同で11月1日と11月7日に実施した。調査は産地が集中している東山東地区内76園地で行い、株枯病発生の有無やイチジク株枯病を媒介するアイノキクイムシ等の食害跡を確認した。調査の結果、イチジク株枯病は軽症を含め調査園地のうち42%の園地で発生が見られた。調査後、各園地に調査結果と防除方法を記した看板を掲示し農家へ防除の啓発をはかった。

今後も引き続き、防除対策としてイチジク株枯病では薬剤灌注処理、アイノキクイムシでは主幹部への薬剤塗布処理の徹底を推進することによりイチジク株枯病の感染拡大を抑えていきたい。



全株調査



株枯病を発症し枯死した株

3. 和歌山地方農村青年交流会～極甘ミカン収穫とミカンジュース作り

体験～を開催

11月2日、和歌山地方農村青年交流促進協議会（井口和哉会長）と海南市4Hクラブ連合会（前山明日規会長）主催で今年度2回目となる和歌山地方農村青年交流会を開催した。

本交流会は、地域の魅力や農業・農村生活に対する理解と関心を深めることを目的に、毎年夏に1回、地域の農産物や伝統文化に関する体験交流を行っていたが、昨年度から参加者のアンケートで希望が多かった、ミカンの収穫体験を秋に開催するようになり、今年で2年目となる。

当日は大阪府や和歌山市から女性8名、男性6名の参加があり、海南市下津町のミカン園地にて完熟ゆら早生の収穫体験を行った。収穫するだけでなく、参加者に実際に食べたミカンの糖度を予想してもらい、測定してもらったゲームもおこなった。ミカンを栽培しているクラブ員らは、おいしいミカンの特徴や片手採りの方法を参加者に説明した。

収穫体験のあとは、元JAの支店を改修したカフェ「KAMOGO」に移動し、クラブ員からミカンの絞り方などの説明を受け、収穫したミカンでジュース作りを行い、ミカンを使ったスイーツを食べながら交流を楽しんでいた。

参加者からは「おいしいミカンの選び方を教えてもらえてよかった」など多数の感想が寄せられた。

農業水産振興課では、今後も、両協議会の活動を支援しながら農業者と消費者交流の場をつくっていきたいと考える。



ミカン狩りをする参加者



収穫したミカンをジュースに加工する参加者

Ⅱ 那賀振興局

1. 各農業団体が紀の川市産業まつり&食育フェアで地域農産物をPR

11月24日、紀の川市農業士会（飯田勝会長）、紀の川市環境保全型農業グループ（畑敏之会長）、那賀地方有機農業推進協議会（関弘和会長）、紀の川市生活研究グループ連絡協議会（坂口富子会長）、紀の川市4Hクラブ（米田基人会長）、那賀農業改良普及推進協議会（中村慎司会長）は、貴志川体育館・駐車場で開催された紀の川市産業まつり&食育フェア（以下産業まつり）に参加し、地域の農産物をPRした。

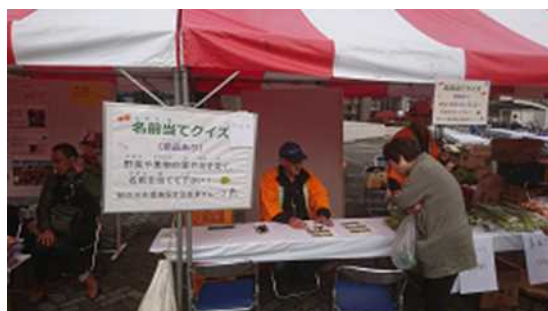
農業士会は柿、キウイ、みかん、花き類を販売し、環境保全型農業グループは生産した果樹・野菜の販売に加え、野菜や果物の名前あてクイズを行った。那賀地方有機農業推進協議会は、会員が生産した野菜と地元のシシ肉を使ったポトフ、生活研究グループは特産の柿を使ったジャンボ巻き寿司作り体験の実施、4Hクラブは秋冬野菜、コーヒーなどの販売を行った。また、那賀農業改良普及推進協議会では、パネル展示を行い、普及活動の取組成果及び那賀地方の農産物についてPRを行った。

来場者からは、「今年は野菜が高いので、産業まつりでの野菜販売はありがたい」、「昨年もいただいたポトフをまた食べにきた」など様々な声があった。

今後も、農業水産振興課は様々なイベントを通じて地元農産物のPRを行う農業者団体を支援していく。



紀の川市農業士会



紀の川市環境保全型農業グループ



那賀地方有機農業推進協議会



紀の川市4Hクラブ

2. 新規就農者研修会を開催

11月28日、アグリビギナー等技術経営研修事業を活用し、新規就農者及び農業次世代人材投資事業の給付金受給者、県農林大学校社会人過程研修生を対象に経営・果樹研修会を開催し、8名が参加した。

経営研修については、(株)八旗農園 専務取締役 中裕 泉氏(指導農業士)から、「ブランドが形を変え、新たな分野で仲間づくり」と題して、起業から現在に至るまでの苦労や経験談を新規就農者へのアドバイスを交えながら講演をいただいた。

中裕氏の農業経営の特徴として、経営の法人化や根圏制御栽培(栃木県農業試験場開発技術)の導入、加工品開発(桃ピューレ等)、担い手育成(JAトレーニングファーム、インターンシップ受入等)などが挙げられる。

参加者からの起業後の苦労を3つ挙げてくださるとの質問に対しては、①社員の給料の確保、②まとまった経営力のある農地の確保、③利益の確保(売上の10%)に苦労したとのこと。

果樹研修では、管内の推進品目であるイチジクの栽培について、JA紀の里 営農指導員 鈴木敏之氏から栽培マニュアルをもとに説明をいただいた。

導入する際のアドバイスとしては、イチジクは特に収穫・調整作業に追われるため、まずは小面積から栽培を始めてみると良いとのことであった。

農業水産振興課は、今後も研修生や新規就農者が求めている内容の研修会を開催し、新規就農者を支援していく。



研修会

Ⅲ 伊都振興局

1. 小学生を対象に柿の体験学習を実施

伊都地方農業振興協議会（市町、J A、農業共済、振興局で構成：以下、協議会）では毎年10月と11月に、管内外の小学生を対象に「柿の体験学習」を行っており、協議会のメンバーが出前授業を実施した。

本取組は、平成13年度からスタートし、本年で18年目で、平成30年度までに訪れた小学校はのべ352校（対象児童数：18,525人）である。今年度は、管内、和歌山市、守口市の23校1,140人に体験学習を行った。

体験学習は柿の話、試食、体験といった内容で、柿の話では和歌山県が日本一の柿産地であることや、柿農家の作業や加工・流通等をクイズも交えて楽しみながら学び、試食では、渋柿の渋味を体験した。渋みを体験した児童からは「口がパサパサする」、「口が変な感じ」といった感想があったが、その後に渋抜きした柿を食べると「甘くて美味しい」、「さっきと全然違う、もっと食べたい」などの声があがった。

体験では10月はアルコールによる渋抜き体験、11月はつるし柿作り体験を行った。

農業水産振興課では、小さい頃から本県の特産品である柿に親しむことで食育や消費拡大に繋がることを期待している。



渋柿の渋抜き体験



つるし柿を手に笑顔の子供たち

2. イベントで柿料理のPRを実施

伊都地方農業振興協議会（市町、J A、農業共済、振興局で構成：以下、協議会）では、柿の消費拡大PRのため、イベントで柿料理の提供を行っている。

伊都管内各市町のイベント（高野町交流広場：11月2日、まつせはしもと：11月4日、大収穫祭 IN 九度山：11月16日、かつらぎ町産業まつり：11月17日）では、管内の学校給食の定番メニューである「柿カレー」を延べ4日間で1600食を提供した。

「柿カレー」は富有柿を入れて煮込むことで柿の甘さでまろやかになり、試食した人からは、「家でも作ってみたい」とレシピを求めるお客さんも多く、好評であった。

また、「わかやま健康と食のフェスタ2019（和歌山市）」では、信愛女子短期大学・コン

ソーシウム和歌山と共同出展し、協議会では11月9日に「柿のホットサンド」400食を試食提供した。

「柿のホットサンド」は食パンにスライスした柿、チーズ、スライスしたアーモンドを挟んだホットサンドで簡単に調理可能で、試食した人からは、「家でも試したい」、「柿の甘さとチーズの風味が合っておいしい」などの評価であった。

農業水産振興課では、今後も柿の利用推進を図り消費拡大につなげたい。



「まっせ・はしもと」での柿カレーのPR



「わかやま健康と食のフェスタ」で柿のホットサンドのPR

3. 新規就農者研修会を開催

農業水産振興課では、新規就農者の栽培技術の向上と先輩農家との交流を図るため、11月26日に大規模経営と加工をテーマにした新規就農者研修会を開催し、新規就農者ら12名が参加した。

初めに、株式会社パーシモンの代表小川教雄氏（紀の川市）から、野菜・果樹・花き栽培とあんぼ柿の加工販売を組み合わせた複合経営について説明を受けた。その中で、小川氏が工夫しながら製作した、あんぼ柿の加工作業を省力化するための道具などの紹介もあった。

続いて、株式会社パーシモンの加工場、小川氏の野菜園地を見学し、農地造成や施設整備、土づくり、品目選び等について説明を受けた。

参加者からは、「投資についての考え方を学べた」、「これからの農家としての生き方、経験を聞いたのはとても良かった」等の感想があった。

農業水産振興課では、今後も新規就農者の経営力の向上を目的とした研修や農家相互の交流を図るための取組を実施していく。



意見交換



野菜園地視察

IV 有田振興局

1. 小学校でみかんの授業が行われました！

11月8日、有田川町4日クラブの亀井勇希氏の指導のもと、有田川町立鳥屋城小学校で3年生を対象に、収穫体験授業が行われた。亀井氏から、日光がよく当たる樹の赤道部が特に美味しいことや、樹の下にマルチを敷いて、土の水分を調節したり、光を反射させたりしているのととても美味しく仕上がっていることなどの説明を受けた後、児童はグループに分かれコンテナいっぱいのみかんを収穫していた。同校では、これまでもみかんについての学習や摘果体験を実施しており、みかんがどのように成長したか、子どもたちも興味を持って取り組んでいた。

また、11月19日には県果樹園芸課の食育事業の一環として、広川町立南広小学校で「みかん」の贈呈式および出前授業を行った。

贈呈式では、児童代表が、広川町のみかん農家で指導農業士の伊藤雅秋氏と立石果樹園芸課長から、みかんを受け取った。

授業では、伊藤氏から農業の大切さ、家族で農作業することの喜びや環境の変化でみかんづくりが難しくなっていることなどの話があった。また、上山普及指導員から、みかんの生産状況やおいしいみかんの見分け方、みかん以外の柑橘類(ゆず等を実物展示)などについて説明をした。

管内では、地元特産品のみかんについて学ぶ食育授業が活発に行われており、今後も支援していきたい。



鳥屋城小学校での授業



南広小学校での授業

V 日高振興局

1. 重点プロジェクト

【新病害虫や梅干し生産への特化のリスクに強い梅産地づくり】

～日高地方クビアカツヤカミキリ連絡会議及び研修会を開催～

11月7日、日高振興局において日高地方クビアカツヤカミキリ連絡会議（事務局：農業水産振興課）及び研修会が開催され、17名が出席した。

当連絡会議は、クビアカツヤカミキリに関する情報共有体制の整備を目的に、日高地方の各市町、JA紀州、農作物病害虫防除所、日高振興局（林務課、農業水産振興課、衛生環境課）が連携して、発生確認調査等を実施している。

まず当課から、本年における日高管内のクビアカツヤカミキリ発生状況調査の結果について報告した。5月～8月の成虫発生期に、日高管内各市町のサクラ植栽地84地点、計2,775本の調査でいずれも発生は確認されなかった。

次に、うめ研究所の江畑研究員から、全国における発生状況及び対策について情報提供があり、今年は奈良県や三重県等で新たな発生が確認され、被害は急速に拡大しているということであった。

研修会では、林業試験場の法眼主任研究員が「山地性バラ科樹種の細枝に接種したクビアカツヤカミキリ孵化幼虫の発育」について講演した。

法眼主任研究員は、ヤマザクラでクビアカツヤカミキリ幼虫が普通に発育することから、今後被害に遭う可能性があり、侵入を防ぐためには早期発見が重要とのことであった。

連絡会議では、今後もクビアカツヤカミキリの情報共有や監視活動を継続するとともに、農業者以外にも注意喚起を図り、地域一体となった早期発見・被害防止対策を図っていく。



日高地方クビアカツヤカミキリ連絡会議

2. 重点プロジェクト

【新病害虫や梅干し生産への特化のリスクに強い梅産地づくり】

～梅のカットバック処理における低樹高化実証～

みなべ町では、青梅出荷は収穫労力がかかる上、生産者の高齢化や雇用労働力確保の問題もあり、生産量に占める青梅出荷比率が減少傾向にある。

青梅出荷量の拡大を図るため、農業水産振興課ではうめ研究所等と連携し、ウメ「南高」

の低樹高化技術による省力化栽培の推進に取り組んでいる。

昨年は、熊瀬川地区に現地実証園を設置し、栽培講習会等を実施してきた。

本年は、清川地区への波及を図るため、11月20日に現地実証園を設置した。

カットバック処理は、高さ4.5m以上のウメ樹の主枝をチェーンソーで2.5mまで切り下げた。主枝を一気に切り下げると枯れ込みが懸念されるため、50cm程度枝を残し、切り口には癒合剤を塗布した。

来年4月下旬と5月中旬には、摘心処理を行い、徒長枝を結果枝化することで、慣行並みの収量を確保しつつ、省力化栽培を実現する予定である



カットバック処理前(点線は2.5mライン)



処理後

3. 御坊市4Hクラブがプロジェクト活動の一環で現地検討会を実施

御坊市4Hクラブ(西田成貴会長)の会員4名は、11月7日にプロジェクト活動の一環として、微生物農薬散布ほ場の現地検討会を行った。

今年度のプロジェクト活動では、施設ピーマン栽培のうどんこ病防除における微生物農薬の有効性を検討しており、試験を実施している古谷晃司氏のは場で、うどんこ病の発生程度や葉斑の残り具合をチェックした。この日は、微生物農薬を散布した区、対照区ともうどんこ病の発生は認められず、葉斑も軽微であった。

微生物農薬は、対象病害の薬剤抵抗性が発達しにくい、使用回数の制限がないなどの特徴があり、引き続き防除効果とともに、営農上のメリットが得られるかについても評価する予定である。



微生物農薬の効果を現場で確認

4. 日高川町4Hクラブが試作園地で在来系高糖度サツマイモを収穫

日高川町4Hクラブ(森幹也会長)では、同クラブ員の休耕地を活用し、在来系高糖度サツマイモの試作(1a)に取り組んでいる。今年は農業試験場の実証データを参考に、バーク堆肥の混和と黒マルチの敷設を行い、昨年以上の上イモの獲得と増収を目指した。

畑を耕耘・調整後、6月12日に苗を定植し、11月12日に収穫した。主な管理は、苗の枯死防止用の藁がけや蔓が繁茂するまでの数回の除草作業のみであった。

収穫した結果、全体で約140kgのイモを収穫することができ、サイズでは150g以上の上イモが半分以上を占め、データ同様の結果が得られた。一つの苗に5~6本のイモが着生しており、クラブ員らは昨年以上の収量やイモの肥大程度に大変驚いていた。バーク堆肥やマルチ敷設による土壌環境の改善が結果につながったほか、大幅なコストや管理労力をかけず成果が得られたことで、クラブ員は手応えを感じていた。

収穫したイモは、本クラブの活動や在来系高糖度サツマイモのPRのため、令和2年2月上旬に日高川町で開催される「農業祭」にて、焼き芋にして販売する予定である。



収穫作業を行うクラブ員



収穫した在来系高糖度サツマイモ

5. 日高町立内原小学校でみかんの出前授業を実施

県では、平成24年度から地産地消の取組として県内の小学校及び特別支援学校の給食や家庭科等の教材に、主要農水産物の提供を行っている。

11月14日、日高町立内原小学校の4年生2クラス(54人)を対象に、みかん出前授業を実施した。

当日は、食育ボランティアで果樹農家の坂口久美子氏が、みかんづくりの大変さや収穫したときの喜びなどを話した。坂口氏は、「夏の暑い時に小さい実を摘み取り、農薬や肥料をやって、熟したら収穫することや、狸や猿、カラスなどからみかんを守るため、いつもパトロールしている。冬まで育ったみかんが一番美味しい。1日にみかんを3個食べると元気になるし、骨に良い成分が入っているので、おじいちゃんやおばあちゃんにも教えてあげてほしい」と話された。

その後、農業水産振興課水上普及指導員から、和歌山県のみかんの生産状況や栽培方法、美味しいみかんの見分け方、みかんの皮のむき方などを説明した。最後に、坂口氏から提供されたみかんを皆で試食した。

児童からは、「栽培する作業がわかった」、「美味しいみかんの見分け方を家族に教えてあげたい」などの感想があった。



みかんづくりの話をする坂口氏



みかんの出前授業

6. 印南町農業士会がジビエをふるまう ～シカレディースも出動～

11月17日、印南漁港において「第11回印南かえるのフェスティバル」が開催され、印南町農業士会（村上智一会長）がシシ肉とシカ肉の試食会を行った。

試食会では、特製のタレに漬け込んで揚げたジビエ竜田揚げにし、来場者約500名に試食提供をした。

また、家庭でのシカ肉料理の普及に取り組むシカレディースも出動し、試食とジビエ料理レシピ(150部)の配布も行った。

ジビエの部位による食味や食感の違いを実感してもらうため、シシ肉・シカ肉ともロース、モモの2部位を用意し、来場者に提供した。

来場者からは「柔らかくて美味しい」、「ジビエ特有の臭いが気にならない」などといった声が聞かれ、肉の部位の違いが気になると何度も試食される方もいた。

用意していたジビエ(猪肉5kg、鹿肉5kg)は、11時前にすべて完食した。

印南町でもイノシシやシカ等による農産物の被害が問題となっている。このようなことから同会では野生鳥獣を単なる害獣ではなく、地域資源であるジビエを美味しく食べてもらうことを目的として、試食提供を実施しており、本イベント出展も今年で9年目となる。今後も、鳥獣害対策の一環として活動を続けていく予定である。



試食会



シカレディースによるレシピの配布

7. シカレディースがシカ肉料理検討会を実施

11月21日、日高川交流センターにおいて日高地方生活研究グループ連絡協議会（後藤明子会長）の有志でシカ肉料理の普及に取り組んでいるシカレディース（後藤明子隊長）の隊員8名が、シカ肉料理検討会を行った。

これまで、シカ肉料理講習会やイベントでの試食会の開催、料理レシピ集の配布などの活動を継続している。以前作成したレシピ集以外に新メニューがないため、検討会を開催することになった。

当日、隊員が「シカ肉のキーマカレー」と「シカ肉の麻婆豆腐」、「かぼちゃとシカのそばろあんかけ」の3品を試作り、皆で試食しながら、シカ肉料理の普及と今後の活動について検討した。隊員からは、「シカ肉は臭みがなく、食べやすい」、「簡単で美味しくできたので、新メニューに入れるとよい。」などの声があった。

今後も、家庭や学校給食で美味しいシカ肉料理を食べてもらえるように活動を継続していく。



料理を試作する隊員



調理方法等について検討

8. 印南町4Hクラブが中学生に印南町の農業を紹介

印南町4Hクラブ（西山和克会長）は、11月25日に印南町立清流中学校の2年生11名を対象に、印南町の農業を紹介する授業および農作業体験を行った。

印南町は農業が盛んな地域であるが、近年新規就農者が減少しており、同クラブは現在5名での活動となっている。この状況を打開するためにどうすればよいかを考えたところ、子供のうちから農業への関心を高める取組が必要ではないかとの意見が出され、昨年度に引き続きプロジェクト活動として取り組んでいる。

当日は、印南町の農業について概要を紹介した後、同校周辺地域で栽培されているエンドウ、千両、梅等の栽培を品目別に説明した。その後クラブ員のカーネーションほ場へ移動し、収穫および出荷調整体験を実施し、収穫した花の一部を生徒らにプレゼントした。

生徒からは「地元の農業について知らないことがたくさんあった」、「毎日同じ作業をやるのは大変そう」などの声があった。

今回のような子供への教育活動は長期的な取組が必要となるため、今後も継続できるよう4Hクラブへの支援を継続していく。



印南町の農業について説明するクラブ員



カーネーションの収穫

VI 西牟婁振興局

1. 重点プロジェクト【気象条件等に対応した果樹産地の振興】

～ウメ「橙高」栽培実証園のせん定研修会を実施～

農業水産振興課では、ウメの梅干し用途以外の新たな需要拡大を図るため、4年前から県オリジナル品種で機能性成分（β-カロテン）が豊富な「橙高」の導入推進に取り組み、田辺市上芳養に栽培実証園を設けている。早期成園化に向けて、若木から多収が見込まれるスレンダースピンドルという整枝方法（主幹形のひとつで樹高を2.5m程度に止め、樹冠をコンパクトに維持する）を用いて、密植栽培（植栽本数48本/4a）に取り組んでいる。

11月26日にせん定研修会を実施。園主、JA紀南営農指導員、うめ研究所及び振興局農業水産振興課職員の計9名が参加した。

最初に、これまでの経過、今年の収量や果実の販売先などについて、当課の前田普及指導員から報告を行った後、「橙高」の加工品開発の進捗状況や今後の展望について、うめ研究所の下村研究員から説明を行った。

研修会ではうめ研究所の城村主査研究員が講師となり、「橙高」の特性^{※(1)}や、スレンダースピンドル特有のせん定方法^{※(2)}を説明しながら実演した。その後、参加者全員で実際にせん定を行い、普段のせん定方法との違いを確認した。参加者からは、「収穫後の樹勢回復にはどのような液肥が有効か」、「主枝が太くなりすぎた場合は、枝をどのように更新するのか」といった質問が出された。

当課では、引き続き実証園の栽培管理を通じて、早期成園化技術の実証に取り組むとともに、導入面積の拡大に向けて「古城」や「露茜」の受粉樹としても導入推進を検討する。また、「橙高」の特徴を活かした加工品開発を進めるため、今後とも関係機関と連携していく。

※(1)「南高」より樹勢が弱め、自家和合性だが隔年結果しやすい、など

※(2)徒長枝をすべてせん除し、細かい芽を出させる。主枝はらせん状に100度程度ずらし4～5本配置。樹勢を維持するため、地上高60cmより低い枝はせん除する、など



せん定方法の説明



せん定の実習

2. 分枝系ストックの育苗省力化試験～仮植えを省いた育苗体系へ～

すさみ町や白浜町では、冬季温暖な気候を活かして露地トンネルや無加温ハウスで分枝系ストックが栽培されている。分枝系ストックの育苗では、育苗床に播種した苗を一度仮植えした後、本ばに定植する。この仮植えは、植え替え時に直根を切ることで、根量が増加し、定植後の活着・生育を促進させる技術であるが、仮植作業に労力がかかることが課題となっている。このため、農業水産振興課では育苗床において苗に断根処理を行い、仮植え作業を省略する育苗体系をすさみ町現地ほ場（津村氏園）で検討している。

は種後約3週間育苗した苗を10月15日に八重鑑別と間引きを行い、10月21日にステンレスの板を育苗床の畝側面から差し込んで断根処理を行った。この苗を11月5日に本ばに定植、11月29日に摘芯を行った。現時点での問題として、①現状の播種量では密植となることから、断根処理を想定した適切な播種量、播種方法が必要、②今回使ったステンレス板では畝の中央部分の苗に断根処理ができていない個体が見られたことから均一に断根処理を行う方法の検討の2点があげられた。

今後は切り花本数、切り花品質、開花期などを調査し、本技術の現地適応性を確認する。



実施した断根処理の方法

注) ステンレスの板を畝側面から
差し込んで処理



定植時の苗

左) 断根処理により根量が増加した苗
右) 断根処理ができなかった苗



分枝系ストックの試験ほ場

3. 西牟婁地方農業士会女性部会が梅消費PR活動を実施

西牟婁地方農業士会連絡協議会女性部会（橋坂佐都美部会長、13名）が、梅を都市の子供たちに知ってもらい、消費拡大に繋げようと大阪府立佐野支援学校中学部の生徒47名と教員19名（11月14日実施）、大阪府立東淀川支援学校高等部の生徒11名と教員4名（11月15日実施）を対象に、梅の座学と加工体験実習等を行った。

座学では部会員が「梅の一年」について、パワーポイントを使って、梅の花や生長する様子、栽培方法、梅干しが出来るまでの作業等を説明した後、梅の加工品や機能性について紹介した。

また、加工実習では、部会員が梅ジュースの作り方を実演したあと、生徒が冷凍梅を使ったジュースづくりを体験し、その後3種類（「南高」、「古城」、「パープルクイーン」）の梅ジュースの試飲を行った。

生徒からは「梅ジュースが出来るのが楽しみ。簡単なのでまた作りたい。」、「梅の種類によって梅ジュースの味が違う!」、「梅は1日にどのくらい収穫できるの?」等たくさんの質問があった。また、教員からは「授業で自分たちが作ったものを飲食する機会があまりないので、楽しい時間を生徒たちと過ごすことが出来た」、「普段出来ない体験なのでありがたい。梅のことをよく知ることが出来た」等の意見があった。

さらに、家庭や学校の給食に使ってもらえるように、白干梅と当部会で作成した梅料理レシピも配布した。

当部会では、今後も都市の児童たちに座学や加工体験を通じて梅の魅力を伝えるとともに、保護者へもPRを行い、梅の消費拡大活動を積極的に行っていく。



座学「梅の一年」
（大阪府立佐野支援学校）



梅ジュースづくり体験
（大阪府立東淀川支援学校）

4・ジビエの出前授業で調理実習を実施しました

農業水産振興課ではジビエの普及と地産地消の推進を目的に、昨年度から小学校でのジビエの出前授業で調理実習を実施している。田辺市上芳養地区出身のフランス料理シェフ 更井亮介氏を講師に招いて、11月8日に白浜町立南白浜小学校の6年生9名と、11月11日に白浜町立日置小学校の6年生16名を対象に、ジビエに取り組む意義を説明するとともにシカ肉の焼きそば作り実習を行った。

最初に更井シェフから「ジビエとは何か」と「野生鳥獣による農作物被害」を説明し、料理を作ってくれた人や命をいただくことに対して、感謝の気持ちを持って欲しいと児童たちに呼びかけた。

その後、調理実習では児童たちはシカの薄切り肉を使ったソース焼きそばを作り、更井シェフが作ったイノシシ肉ミンチのそばろ井と一緒に試食した。児童からは、「食べ物への感謝の気持ちや命の大切さを学べた。」、「シカ肉は普段食べているお肉よりも少し硬いが、おいしかった。」、「レシピをもらったので、家庭でも挑戦してみたい。」という感想が聞かれた。

当課では今後もジビエの普及と地産地消を推進するために、西牟婁地方学校栄養士研究会と連携し、田辺・西牟婁郡内の小学生を対象に食育の授業や調理実習を実施していく。



出前授業



児童ときいちゃんの記念撮影



調理実習



シカ肉の焼きそばと
イノシシ肉のそばろ井

Ⅶ 東牟婁振興局

1. 古座川梅研究会がウメ剪定講習会を開催

11月5日、古座川梅研究会（新屋常夫会長、会員5名）は、ウメ剪定技術の向上のため研究会会員の梅園4カ所で剪定講習会を開催した。

はじめに、農業水産振興課浅井普及指導員からウメの剪定の基本技術の説明を行い、その後、ウメの剪定講習を行った。各園地は、樹齢や園地条件（水田転換畑・造成地）等が異なることから、状況に応じた剪定方法やそれぞれの園地に適した栽培方法の話し合いも交えながら行った。

この他、今回の講習会では、農作業安全啓発チラシにより事故事例と事故防止のポイントについて説明を行い、農作業事故防止の啓発を行った。

当課では今後も、ウメの新技术や安定生産・高品質化を推進していく。



うめの剪定講習会（古座川町三尾川）

2. 三津ノ地域活性化協議会が「サツマイモ収穫体験」を開催

11月9日、三津ノ地域活性化協議会（下阪殖保会長）は、新宮市熊野川町の休耕田を活用したサツマイモ畑の収穫体験を開催した。新宮市内外から家族連れなど9組22名の参加があり、それぞれが6月のサツマイモ植付け体験で苗を植えた園地で収穫を行った。

最初に下阪会長がサツマイモの収穫方法について説明した後、参加者は以前に植え付けた区画をスコップで掘り起こし、サツマイモを傷つけないように収穫作業に取り組んでいた。参加者からは「大きいのがとれた」「初めての体験。とても楽しい。これからも、こんな体験をたくさんしたい」等の感想が聞かれた。また、今回は熊野川町でとれたサツマイモとエビ芋を焼き芋にして参加者にふるまい、「エビ芋がおいしい」との感想が多かった。

農業水産振興課では、これからも関係機関と連携しながら、三津ノ地域活性化協議会の取り組みを支援していく。



サツマイモの収穫体験



参加者へのふるまい焼き芋

3. にんにくの県内視察研修を実施

11月14日、古座川町にんにく生産組合（羽山一夫会長）と串本町にんにく生産組合（沖正史会長）は、合同で県内視察研修を実施し、JAありだ管内のニンニク栽培ほ場を視察した。当日は生産者6名、JAみくまの職員3名、JAグループ和歌山農業振興センター職員1名及び農業水産振興課1名が参加した。

初めに、JAありだ吉備営農センターにて、センター職員の梅本貴紀氏と坂井吉輝氏からJAありだにんにく部会の取組みと今年度のニンニクの生育状況について説明があった。今年度は9月下旬が天候不良のため、9月中旬に植付けたものよりも10月上旬に植付けたもののほうが生育が良いとのことだった。

その後、現地のニンニク栽培ほ場を見学した。品種は、暖地向きで比較的生育の早い「上海早生」が栽培されており、4月中の早期収穫を目的として透明のマルチ資材を使用していた。東牟婁管内の栽培方法（品種として暖地向きで「上海早生」よりも大玉傾向の「平戸」を栽培。マルチ資材は、雑草防除と冬期の地温低下を防ぐため黒色のマルチ資材を使用。）とは異なっており、それぞれの栽培の利点と欠点について園主と参加者との間で意見交換が行われた。

当課では、今度も両組合の活動を支援していく。



JAありだにんにく部会の取組み等の説明



視察研修先の栽培ほ場（有田市糸我町）

4. 東牟婁農業青少年クラブ連絡協議会が農産物即売会を開催

11月23日、東牟婁農業青少年クラブ連絡協議会（福本孝之会長 以下4Hクラブ）は那智勝浦町体育文化会館前で農産物即売会を開催した。

4Hクラブでは、那智勝浦町農産物品評会の開催に合わせて、クラブ員がそれぞれ生産した農産物や加工品を持ち寄り、例年開催している。

今年は10月の長雨の影響により葉物野菜の数が少なかったが、例年通り多くの人々が即売会テントを訪れ、売れ行きは好調だった。クラブ員は訪れた人と会話を楽しみながら、販売物の味や料理の際のポイント等を伝え、地域の消費者に対し地元野菜のPRを行った。

農業水産振興課では今後も地域の担い手である4Hクラブの活動を支援していく。



農産物の即売会



地元野菜のPR

5. 和歌山大学食農総合研究所が東牟婁地域で現地研究会を開催

11月25日、三津ノ地域活性化協議会（下阪殖保会長）協力のもと、和歌山大学食農総合研究所は熊野川町総合開発センターで現地研究会を開催した。「農業・農村生活体験のビジネス化」をテーマに、同研究所特任助教の植田淳子氏、日高川町ゆめ倶楽部21前会長の原見知子氏が講演した。研究会には三津ノ地域活性化協議会員の他、東牟婁管内の農業士や4Hクラブ員、新規就農者、JA、市、県、同大学の関係者計59名が参加した。

研究会では、植田氏からは「グリーンツーリズムの展開と推進上の課題」と題して、植田氏が実際に携わった大分県安心院町でのグリーンツーリズムの取り組み事例を交えながら講演があった。「お客さんに喜んでもらうには、昔から地域にいる人だけでなく新規参入者も交え、また、農家だけでなく商工会や観光協会、行政等も交えて、地域全体で地域をどうしていくか話し合い、情報共有することが大事」と話された。また、原見氏からは、「中山間地域を活かす～人こそが地域をつくる～」と題して、体験型観光としての農業体験や農家民泊、移住者受け入れ支援の活動を行っている日高川町ゆめ倶楽部21の活動について講演があった。

講演後は、参加者を交え「農家民泊を準備しているが、広い地域でどのように連携してきたのか」、「地域の活動について、どんな仕掛けから始めればよいのか」等積極的な意見交換が行われ、原見氏は「地域で話し合う場を持つことが大事。また、体験でも視察でも、何か取り組みを行った後は、反省会を行い地域に何が一番合うのかを考えてほしい」と訴えた。

農業水産振興課では、今後も三津ノ地域活性化協議会や関係機関と連携しながら、地域活性化に向けた取り組みを推進していく。



現地研究会



意見交換会

Ⅷ 農林大学校 就農支援センター

1. 特別研修「市場研修（大阪市中央卸売市場）」

11月6日、社会人課程と技術修得研修の研修生13名が参加し、大阪市中央卸売市場において研修を行った。

大阪市中央卸売市場本場市場協会職員の案内により果物、水産、野菜売場の順に取扱品目の状況について見学を行い、市場が果たす機能について理解を深めた。見学の途中、果物の競り場においてリンゴの模擬競りを体験した。また、市場見学中には日頃あまり目にしない珍しい野菜が多く見かけたが、和歌山県産の柿やみかんの量に親しみと誇りを感じた。

見学終了後、和歌山県農大阪事務所の協力を得て、大果大阪青果株式会社の果実・野菜の担当者から果実、野菜の販売状況等の説明を受けた。その後の意見交換では、今後有望な品目や、研修生が今後栽培したい品目の市場性について意見を伺った。

研修生からは「市場の担当者ら直接貴重な意見を聞くことができた」、「就農後の販売の方針を考える良い機会となった」という感想が挙げられた。



競り人による模擬競り



果物売り場の見学

2. UIターン就農相談フェアを開催

11月17日、和歌山県JAビルにおいて、本年度第2回目の「UIターン就農相談フェア」を開催した。相談会には、県内への就農を考えている方や農業に興味のある方16組19名（うち県内8組、県外7組、不明1組）が来場した。

県や農協、一部の市町による就農に関する相談に加え、移住相談、資金相談、林業就業相談など幅広い分野のブースでそれぞれの相談者の希望に沿った相談対応を行った。相談者からは「漠然としたイメージしかなかったが、農業についてよく理解することができた」という感想が聞かれた。

また、相談と並行して、新規就農セミナーを開催した。このセミナーでは、就農支援センターや農林大学校で研修を修了し就農した2名の方が、就農した際の苦労話やアドバイス、現在の状況などについて発表し、意見交換を行った。参加者からは「就農するまでに必要な準備や心構え、就農後の農業経営について知ることができてよかった」との声が多数あった。



相談会場



新規就農セミナー

3. 特別研修「ジャム加工について」を開催

11月27日、就農支援センターにおいて、南部高校の岡信孝教諭を講師としてお招きし、特別研修「ジャム加工について」を実施し、社会人課程と技術修得研修の研修生13名が参加した。

まず講師からジャムが固まる原理やジャム作りのポイントについての説明を受け、瓶に詰める際のポイント、ジャムの濃縮度合いを簡単に確認する方法などを学んだ。それに続き、講師による実演と並行して、当センターで収穫したイチゴとブルーベリーを材料に用い、研修生たちもジャム作りを行った。研修生たちは、ジャム作りの工程でわからないことについて確認や質問をしながら作業を分担して協力し、真剣に取り組んでいた。

このような研修を通して本来廃棄する規格外品に付加価値を付け販売する方法や6次産業化について考えるきっかけとなることを願う。



説明を受ける様子



ジャム作り

普及活動現地情報 発行・編集

| | | |
|----------------------|-----------------|-----------------|
| 和歌山県農林水産部経営支援課 | TEL073-441-2931 | FAX073-424-0470 |
| 海草振興局農林水産振興部農業水産振興課 | TEL073-441-3377 | FAX073-441-3476 |
| 那賀振興局農林水産振興部農業水産振興課 | TEL0736-61-0025 | FAX0736-61-1514 |
| 伊都振興局農林水産振興部農業水産振興課 | TEL0736-33-4930 | FAX0736-33-4931 |
| 有田振興局農林水産振興部農業水産振興課 | TEL0737-64-1273 | FAX0736-64-1217 |
| 日高振興局農林水産振興部農業水産振興課 | TEL0738-24-2930 | FAX0738-24-2901 |
| 西牟婁振興局農林水産振興部農業水産振興課 | TEL0739-26-7941 | FAX0739-26-7945 |
| 東牟婁振興局農林水産振興部農業水産振興課 | TEL0735-21-9632 | FAX0735-21-9642 |
| 和歌山県農林大学校 | TEL0736-22-2203 | FAX0736-22-7402 |
| 和歌山県農林大学校就農支援センター | TEL0738-23-3488 | FAX0738-23-3489 |